# 「横浜市子ども・若者実態調査」結果概要

## １．調査の目的

本市の子ども・若者（１５歳～３９歳）の生活状態及び困難を抱える若者のニーズや課題を把握するため、次の手法により調査を実施しました。調査結果を分析し、今後の青少年施策に反映します。

## ２．調査の全体構造

**一般市民調査**

**（１）アンケート調査**

目的：子ども・若者が抱える困難状況のマクロ的把握
①基礎数値の把握（ひきこもり数、無業数、各種リスクを抱える者の数）
②子ども若者が抱える悩み・課題、就労等についての意識や実態の傾向分析
（ひきこもり群・無業群と一般群の比較等）

**（２）追加調査（ヒアリング）　(1)の調査の中で協力者を募り実施**

目的：下記(3)の調査で把握できない困難事例の実態把握及び有効な施策・支援方法の検討
①困難を抱えながら支援機関につながっていない者の事例検証・分析
②支援機関につながらずに困難を克服した者の事例検証・分析

**施設利用者調査**

**（３）支援機関におけるヒアリング調査**

目的：困難事例の実態把握及び有効な施策・支援方法の検討
①困難を抱える子ども・若者の意識や実態についての事例検証・分析
②有効な支援方法・プログラムの抽出

## ３．調査の実施状況

### （１）アンケート調査

①調 査 対 象　：横浜市内に居住する満 15 歳以上 39 歳以下の男女個人
②標　本　数　：3,000 標本（住民基本台帳から無作為抽出）
③方　　法　：郵送配付・訪問回収調査（調査票を郵送後、調査員が回収）
④調 査 時 期　：平成 24 年８月 27 日～９月 17 日
⑤有効回答数　：1,386 人（46.2%）

### （２）追加調査（上記アンケート調査から協力者を抽出）

①標　本　数　：３事例
②調査の方法　：困難を抱えながら支援機関につながっていない者への聞き取り
③調 査 時 期　：平成 25 年１月～２月

### （３）支援機関ヒアリング調査（困難を抱える当事者等）

①標　本　数　：30 事例
②対 象 機 関　：青少年相談センター、若者サポートステーション、地域ユースプラザ
③調査の方法　：支援団体・機関等の紹介を通じて現在支援を受けている当事者及び過去に支援を受けていた方への聞き取り
④調 査 時 期　：平成 24 年９月～10 月

## ４．アンケート調査結果のポイント

### （１）ひきこもり状態にある若者の推計人数（約 8,000 人）

定義：ほとんど家から出ない状態が、６か月以上継続し、かつ、疾病、介護、育児等をその理由としない者

10 人〔男性：６人、女性４人〕（有効回答数に占める割合 0.72%） が該当
24 年１月１日時点の横浜市の年齢別人口において、15～39 歳は 1,136 千人
市内のひきこもり群の推計数は　1,136 千人×0.72%＝約 8,000 人

### （２）ひきこもり親和群（※）の推計人数（約 52,000 人）

（※）定義：家や自室に閉じこもりたいと思うことがある等、心理的にはひきこもり群と同じ意識傾向を持っているが、ひきこもりの状態ではない者

63 人〔男性：28 人、女性 35 人〕（有効回答数に占める割合　4.55%）
市内のひきこもり親和群の推計数は、1,136 千人×4.55%＝　約 52,000 人

ひきこもり状態にある人の回答傾向が一般よりも低いと推定されることを勘案すると、この数値は下限値と考えられます。

**【参考】内閣府及び東京都調査との比較**

・５年前の東京都調査とほぼ同程度の結果となっています。

| 項目 | 横浜市 | 内閣府(*1) | 東京都(*2) |
|---|---|---|---|
| 標本数 | 3,000 人 | 5,000 人 | 3,000 人 |
| 回収数<br>（率＝回収数/標本数） | 1,386 人<br>（46.2%） | 3,287 人<br>（65.7%） | 1,388 人<br>（46.3%） |
| ひきこもり群の出現率 | 0.72% | 1.79% | 0.72% |
| ひきこもり親和群の出現率 | 4.55% | 3.99% | 4.76% |

*1)　内閣府：平成 21 年度　若者の意識に関する調査（ひきこもりに関する実態調査）
*2)　東京都：平成 19 年度　若年者自立支援調査研究　※対象年齢は 15～34 歳

### （３）無業状態にある若者の推計人数（約 57,000 人）

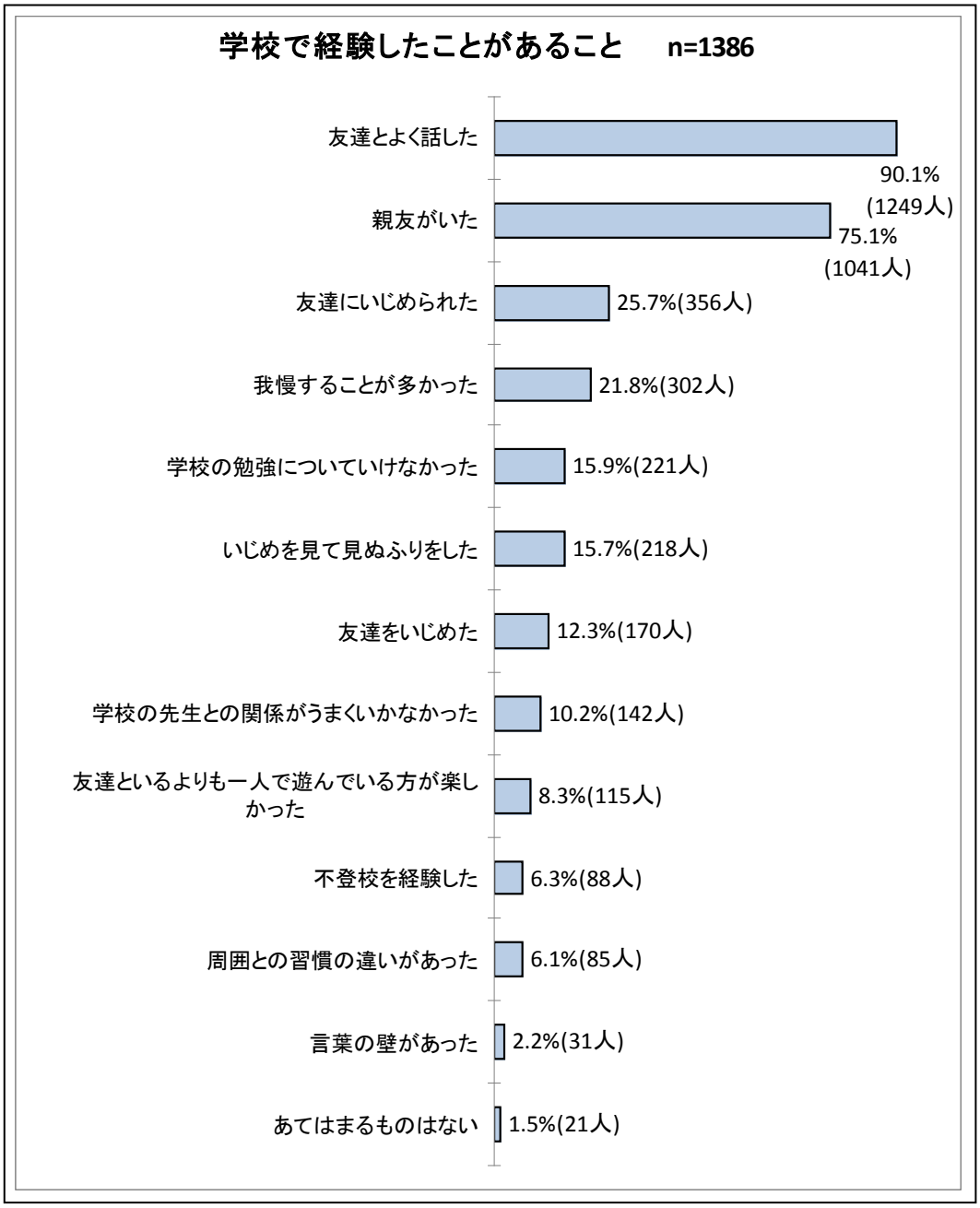
定義：「無職」または「派遣会社などに登録しているが、現在は働いていない」者

69 人〔男性：37 人、女性 32 人〕（有効回答数に占める割合　4.98%）
市内の無業群の推計数は、1,136 千人×4.98%＝　約 57,000 人

## （４）主な単純集計結果

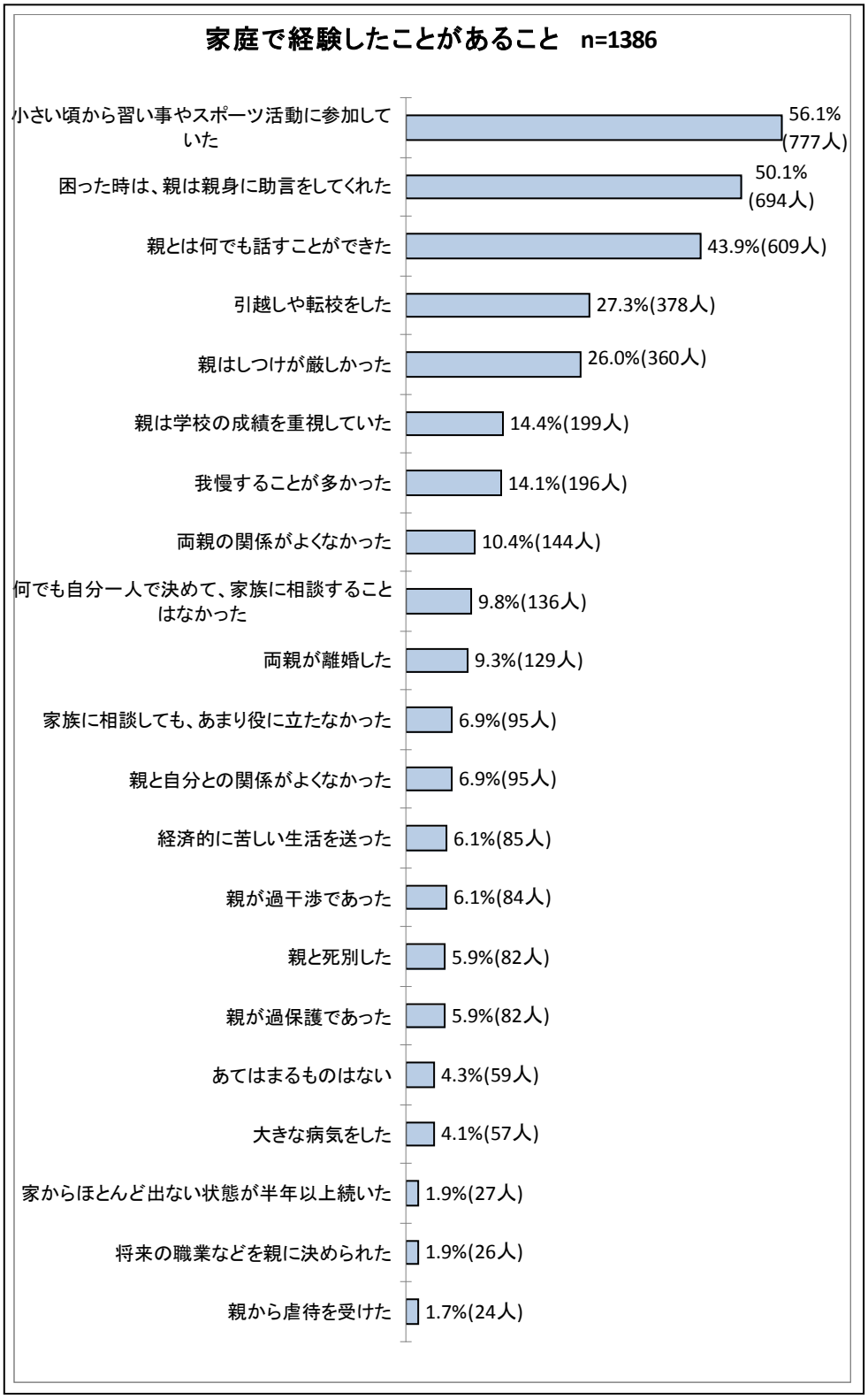
①「あなたはこれまでに、学校で次のような経験をしたことがありますか。あてはまるものすべてに〇をつけてください。（〇はいくつでも）」について

・「友達にいじめられた」者は 25.7%、「友達をいじめた」者は 12.3%、
・「不登校を経験した」者は 6.3%でした。



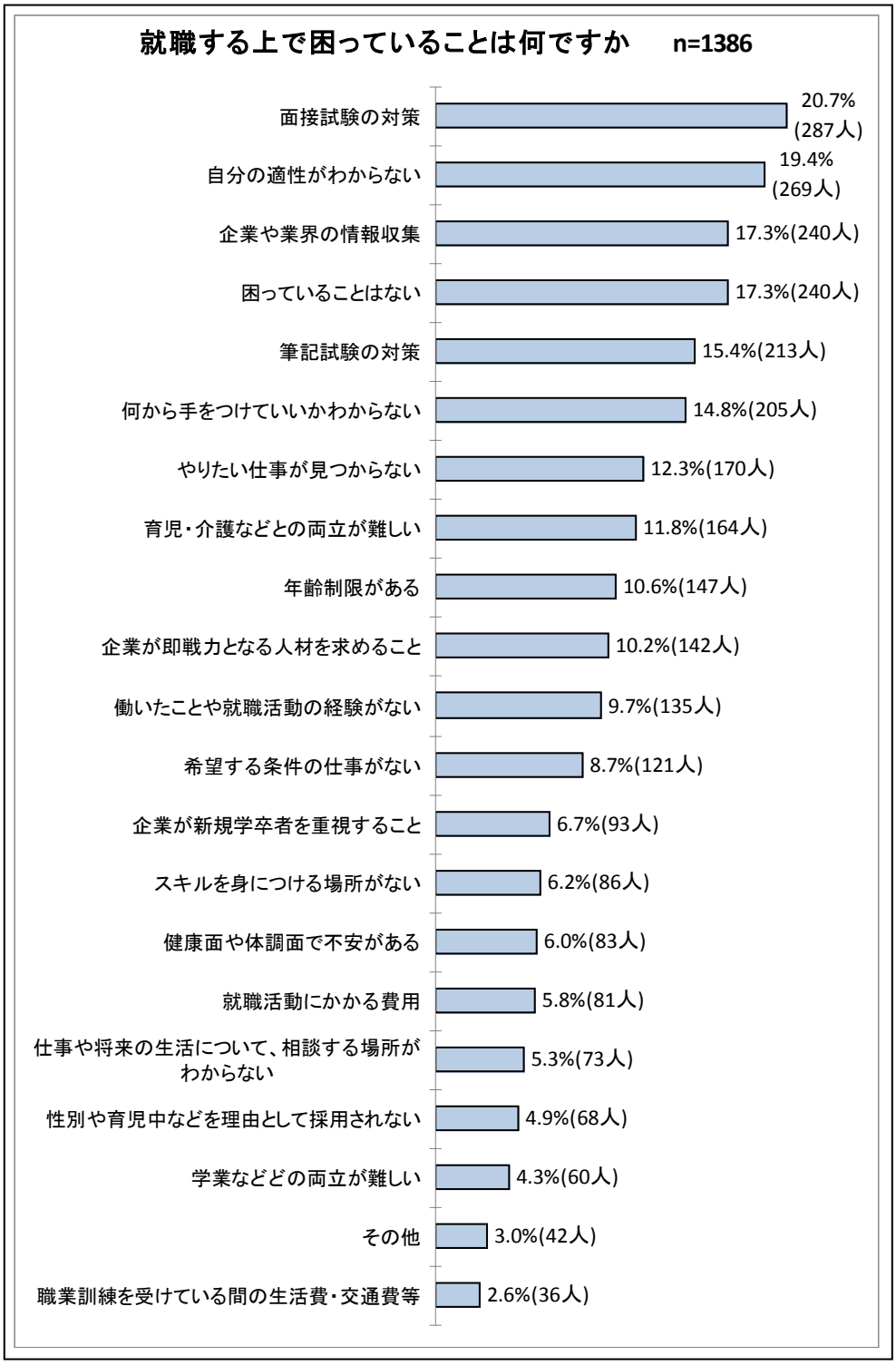
②「あなたはこれまでに、家庭で次のような経験をしたことがありますか。あてはまるものすべてに〇をつけてください。（〇はいくつでも）」について

・「家からほとんど出ない状態が半年以上続いた」者は 1.9%
・「親から虐待を受けた」者は 1.7%
・「経済的に苦しい生活を送った」者は 6.1%でした。



③「就職する上であなたが困ったこと、または困っていることすべてに〇をつけてください。（〇はいくつでも）」について

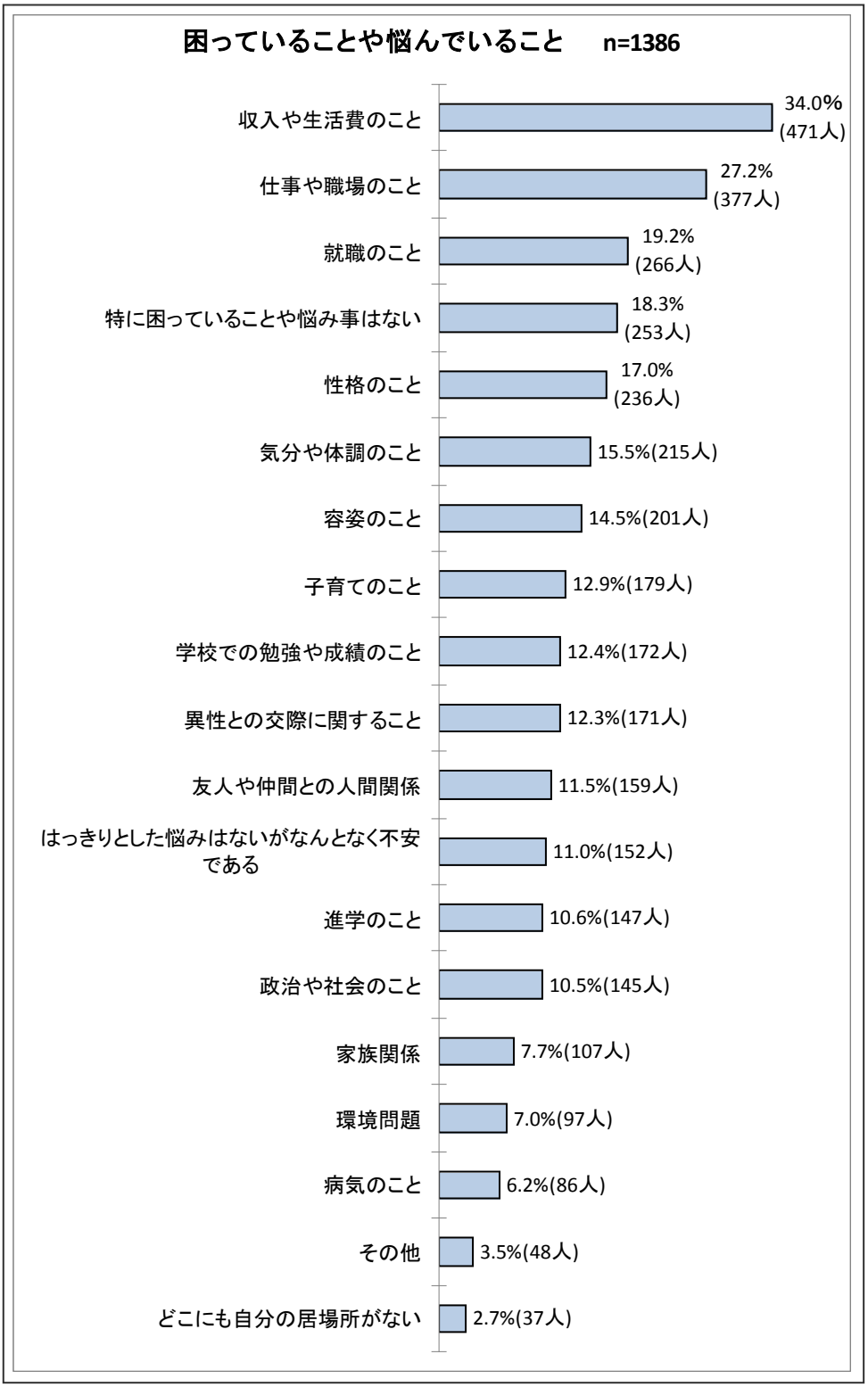
・ 上位５位まで（「困っていることはない（17.3%）」を除く）の回答は、「面接試験の対策（20.7%）」、「自分の適性がわからない（19.4%）」、「企業や業界の情報収集（17.3%）」、「筆記試験の対策（15.4%）」「何から手をつけていいかわからない（14.8%）」でした。



④「あなたは現在困っていることや悩んでいることがありますか。あてはまるものすべてに〇をつけてください。（〇はいくつでも）」について

・上位５位まで（「特に困っていることや悩み事はない(18.3%)」を除く）の回答は、「収入や生活費のこと（34.0%）」、「仕事や職場のこと（27.2%）」、「就職のこと（19.2%）」、「性格のこと（17.0%）」、「気分や体調のこと（15.5%）」

・また、「どこにも自分の居場所がない」者も 2.7%いました。



## ５．追加調査結果のポイント

### （１）対象者選定の経過

・アンケート調査回答者（1,386 人）のうち、142 人から追加調査協力の承諾をいただきました。

・この 142 人のなかから、「過去（または現在）、何らかの困難を抱えていた方」を抽出しました。（27 人）

・27 人に対して、改めて調査協力の意思確認を行ったところ、５人の方が日程調整に応じていただけました。

・この５人に対してヒアリング調査を行う予定でしたが、直前または当日キャンセルとなった方もいたため、最終的には１月２６日、２月２日の二日間で、３人の方に対してヒアリング調査を行いました。

### （２）調査項目及び調査方法

①過去に経験した困難・課題と、困難・課題を克服するに至った道筋
②現在の状況と将来の希望や目標
③相談支援を行う機関等に期待すること・どういう支援の仕方が望ましいと思うか

※ 本市子ども・若者支援協議会委員より、１人あたり 45 分～１時間程度のヒアリング調査を行いました。

### （３）結果概要

（１） 相談支援機関につながらず、**自らの力で困難を乗り越えたケースについて、何がポイントになったのか**を中心に聴き取りを行いました。

（２） 対象となった３人の聴き取りからは、以下の共通点がみつかりました。

① 困難を乗り越えるにあたり、家族・友人の中に、**仮に少人数であったとしても、信頼できる人がいた**ことが大きい。

② 現在は、自分が置かれている状況（自分自身の問題、家族や友人関係、学校や職場の環境など）について、客観的に振り返ることができる姿勢がある。

③ 何らかの困難を抱えている人にとっては、**身近なところに、相談支援機関や多様な人と接する場や機会があると良い**。

（３） 個別の意見として、以下の点は今後の施策推進の参考になると考えられます。

① 子どもたちが多様な大人たちと接するためにも、独身の大人が普通に子ども達と接する機会を設けるべき。

② 学校の掲示板に、もっと地域の活動をＰＲする内容のものを掲示すべき。

③ 小・中・高校にも、児童・生徒が気軽に悩みを相談できる場があると良い。

## ６．支援機関におけるヒアリング調査結果のポイント

### （１）調査方法及び調査項目

#### ①対象者

横浜市自立支援３機関（青少年相談センター、地域ユースプラザ、若者サポートステーション）の利用者で、「現在相談・支援を受けている青少年」又は「過去に相談・支援を受けていた青少年」

※　上記のうち、相談員からの推薦があり、本人から協力をえられる者

#### ②調査方法

各施設代表者等を調査員（ヒアリング担当者）とし、調査員による個人面接（１人あたり１～１時間半程度）を行いました。

#### ③調査項目

ア　困難を抱えた経緯
イ　支援につながる前の心境
ウ　支援機関に来所したきっかけ
エ　支援を受けた感想
オ　現在の思い
カ　伝えたいこと

### （２）自立支援３機関における基礎データ（23 年度新規相談支援利用実績）

#### ①基礎データ

| 若者自立支援3機関 | | | 青少年相談センター（※1） | | 地域ユースプラザ（※2） | | | | | | 若者サポートステーション（※1） | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | 西部 | | 南部 | | 北部 | | よこはま | | 湘南・横浜 | |
| 平成23年度新規相談利用者数 | | | 171 | | 67 | | 124 | | 97 | | 298 | | 222 | |
| 利用者の各属性による割合 | 性別 | 男 | 69.6% | | 50.7% | | 66.9% | | 67.0% | | 66.8% | | 70.3% | |
| | | 女 | 30.4% | | 49.3% | | 33.1% | | 33.0% | | 33.2% | | 29.7% | |
| | 年齢 | 10代 | 62.0% | | 32.8% | | 36.4% | | 25.8% | | 7.0% | | 23.9% | |
| | | 20代 | 36.8% | | 56.7% | | 42.7% | | 53.6% | | 67.0% | | 52.7% | |
| | | 30代 | 1.2% | | 10.5% | | 20.9% | | 20.6% | | 26.0% | | 23.4% | |
| | 所属 | 中学生 | 5.3% | | 1.5% | | 0.8% | | 0.0% | | 0.0% | | 0.0% | |
| | | 高校生 | 36.3% | | 17.9% | | 22.6% | | 4.1% | | 1.0% | | 10.4% | |
| | | 大学生 | 8.2% | | 19.4% | | 0.0% | | 8.3% | | 6.0% | | 3.2% | |
| | | その他 | 2.3% | | 1.4% | | 7.3% | | 7.2% | | 2.0% | | 0.5% | |
| | | 有職 | 1.7% | | 2.9% | | 2.4% | | 9.3% | | 91.0%（求職中） | | 85.9%（求職中） | |
| | | 無職 | 46.2% | | 56.9% | | 66.9% | | 71.1% | | | | | |
| | 支援機関につながった経緯（上位3項目）（※3） | | インターネット | 19% | インターネット | 27% | インターネット | 21% | 区役所 | 28% | インターネット等 | 32% | インターネット等 | 17% |
| | | | 区役所 | 19% | 青少年相談センター | 11% | サポステ | 18% | サポステ | 21% | 保護者 | 12% | 民間支援機関 | 16% |
| | | | 知人 | 8% | 知人 | 11% | 区役所 | 7% | インターネット | 20% | 就労支援機関 | 10% | 健康・福祉機関・病院 | 15% |
| | 主訴（上位3項目） | | ひきこもり | 44% | ひきこもり | 60% | ひきこもり | 41% | ひきこもり | 49% | 就労 | 100% | 就労 | 100% |
| | | | 不登校 | 26% | 就労 | 25% | 就労 | 18% | 神経性障害・精神疾患等 | 18% | | | | |
| | | | 家族関係 | 8% | 精神疾患 | 15% | 障害精神疾患 | 9% | 就労／その他の人間関係 | 9% | | | | |

（※1）青少年相談センター及び若者サポートステーションは、23年度に初回面接後、継続相談支援になった数。

（※2）地域ユースプラザは、23年度の新規相談者数。（居場所利用者のみの登録は含まない）

（※3）若者サポートステーションは、厚生労働省の分類項目で表示

**②データから見える３機関の特徴**

ア　3機関とも、利用者の性別では、**男性7割・女性3割程度**であったが、よこはま西部ユースプラザのみ、男女の割合がほぼ同じでした。

イ　年齢や所属については、次のとおり、特徴が現れました。

**・青少年相談センター**…10 代中心。高校生を中心に、学籍のある方の利用が他機関より多い

**・地域ユースプラザ**…20 代中心であるが、10 代・30 代も少なくなく、各年齢層から幅広く利用されています。また、無職の方の利用が6～7割程度と大半を占めています。

**・若者サポートステーション**…20 代中心。職業的自立を目的とした相談支援を行なっていることから、10 代や学籍のある方の利用は少なくなっています。

ウ　支援機関につながった経緯では、各機関とも、**インターネットでの情報から利用につながることが多い**。一方、他機関からの紹介・引継によって利用する方も多く、**青少年相談センターは区役所から、若者サポートステーションは他の就労支援機関から利用につながる**傾向が伺えます。

エ　主訴について、青少年相談センター、地域ユースプラザともに**「ひきこもり」が最も多い状況**ですが、両機関の利用者の年齢層を反映し、**青少年相談センターでは「不登校」「家族関係」**が、**地域ユースプラザでは「就労」「精神疾患」**がこれに次いでいます。なお、**若者サポートステーションでは、**機関の特性から、主訴は**「就労」に限定**されています。

## （3） 横浜市自立支援3機関におけるヒアリング調査実施結果

①青少年相談センター

| 青少年相談センター | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No | ケース | 属性 | | | | | | | | | | | | センター利用年数 | 支援状況 |
| | | 性別 | 年齢 | 家庭環境 | | 困難を抱える要因 | | | | 支援状況 | | | | | |
| | | | | 生活保護 | 母子家庭 | いじめ | 不登校 | ひきこもり | 医療 | 個別相談 | 家庭訪問 | グループ活動 | 社会体験 | | |
| 1 | Aさん | 男 | 20代後半 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | | 10年 | 継続 |
| 2 | Bさん | 男 | 20代前半 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 5年 | 継続 |
| 3 | Cさん | 男 | 10代後半 | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | 2年 | 継続 |
| 4 | Dさん | 男 | 20代前半 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 6年 | 継続 |
| 5 | Eさん | 女 | 20代半ば | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 7年 | 継続 |
| 6 | Fさん | 男 | 20代半ば | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 11年 | 終結 |
| 7 | Gさん | 男 | 20代半ば | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | 10年 | 継続 |
| 8 | Hさん | 男 | 20代前半 | | | | ○ | ○ | | ○ | | | | 5年4か月 | 終結 |
| 9 | Iさん | 女 | 20代前半 | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | 7年 | 継続 |
| 10 | Jさん | 男 | 20代半ば | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 6年 | 継続 |

1人を除き全員（9人）が 20 代半ばまでの年齢層であり、**全員（10 人）が不登校からひきこもり状態にいたっています。**不登校となった経緯として、学校でのいじめを経験した者が3人いるなど、友人等との対人関係におけるつまずきや、学業におけるつまずきを挙げるものが多くみられました。

青少年相談センター利用者の特徴としては、本人が自発的に利用するのではなく、**家族を通じて利用につながる事例が多くみられること。また、1人を除き全員（9人）が5年以上の利用であり、うち3人については10年以上**となっている等、**利用年数が長期化**していることが挙げられます。

**長期的・継続的な個別相談**によって本人や家族に関わりながら、**グループ活動による同年代とのコミュニケーション**の経験を提供することが有効で、本人の社会参加へつながっています。

②地域ユースプラザ

| 地域ユースプラザ | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No | ケース | 属性 | | | | | | | | | | | | | | 利用年数 | 支援状況 |
| | | 性別 | 年齢 | 家庭環境（例） | | 困難を抱える要因（例） | | | | | 支援状況（例） | | | | | | |
| | | | | 生活保護 | 母子家庭 | いじめ | 不登校 | ひきこもり | 就労 | 医療 | 個別相談 | プログラム参加 | 居場所利用 | 社会体験 | 就労体験 | | |
| 1 | Kさん | 女 | 20代前半 | | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | 1年4か月 | 継続 |
| 2 | Lさん | 男 | 20代後半 | ○ | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1年6か月 | 継続 |
| 3 | Mさん | 男 | 20代前半 | | | | ○ | | | | ○ | ○ | ○ | | | 11か月 | 継続 |
| 4 | Nさん | 男 | 20代後半 | | | | ○ | ○ | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | 1年11か月 | 継続 |
| 5 | Oさん | 男 | 30代半ば | | | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | 3年 | 継続 |
| 6 | Pさん | 男 | 40代前半 | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | 2年 | 継続 |
| 7 | Qさん | 男 | 20代後半 | | | | | ○ | ○ | | | ○ | ○ | ○ | ○ | 5年 | 継続 |
| 8 | Rさん | 男 | 30代前半 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | | 4年 | 継続 |
| 9 | Sさん | 男 | 30代半ば | | | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 2年 | 終結 |
| 10 | Tさん | 女 | 20代前半 | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 3年 | 終結 |
| 11 | Uさん | 女 | 20代半ば | | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | | 2年 | 継続 |
| 12 | Vさん | 女 | 30代前半 | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 1年6か月 | 終結 |

対象者のうち、9人が不登校を、10 人がひきこもりを経験しており、これらの傾向は青少年相談センター利用者に近いですが、**20 代後半以降の方が多くを占めていること（8人）**、それに伴い、**就労についての課題を抱える者も多くいること（8人）**などの違いが表れています。

利用年数としては、青少年相談センター利用者よりも期間が短く、10 人が3年以下でしたが、これは、地域ユースプラザの開所からの期間が最長で5年であることも関係しているものと思われます。

地域ユースプラザの場合、**他機関からの紹介を受け、本人がある程度自発的に動いて利用につながっている**事例が多く、**居場所の利用（12人全員）**を中心に、個別相談による課題の整理、プログラムや体験活動の積み重ねを通じて、**就労等に向けた次のステップにつながっています。**

③若者サポートステーション

| 若者サポートステーション | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| No | ケース | 属性 | | | | | | | | | | | | | | 利用年数 | 支援状況 |
| | | 性別 | 年齢 | 家庭環境（例） | | 困難を抱える要因（例） | | | | | 支援状況（例） | | | | | | |
| | | | | 生活保護 | 母子家庭 | いじめ | 不登校 | ひきこもり | 就労 | 医療 | 個別相談 | プログラム参加 | 居場所利用 | 社会体験 | 就労体験 | | |
| 1 | Wさん | 男 | 20代後半 | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | 4年 | 継続 |
| 2 | Xさん | 男 | 20代後半 | | | | | | ○ | | ○ | ○ | ○ | | | 1年 | 継続 |
| 3 | Yさん | 女 | 20代半ば | | | | | | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | 2年 | 継続 |
| 4 | Zさん | 女 | 30代後半 | | | | | | ○ | ○ | ○ | | | | ○ | 1年 | 継続 |
| 5 | AAさん | 男 | 20代後半 | | | | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | | ○ | 2年 | 継続 |
| 6 | BBさん | 男 | 20代前半 | | | | | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | 1年2か月 | 終結 |
| 7 | CCさん | 男 | 20代後半 | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | 1年2か月 | 継続 |
| 8 | DDさん | 男 | 30代半ば | | | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | | ○ | ○ | 1年6か月 | 継続 |

**全員（8 人）が就労に課題を抱えています。**ひきこもりを経験した者は5人いますが、不登校は1人のみであり、青少年相談センターや地域ユースプラザ利用者との違いがあります。

**利用年数としては、7人が2年以下**であり、青少年相談センターや地域ユースプラザよりも短い期間となっています。若者サポートステーションの場合、**個別相談（8人全員）を行う中で、就労に向けたより具体的な目標設定を行い、個々の状況に応じたプログラムや体験活動を提供**することで、状況の改善につながっています。

（4） ヒアリング結果（事例の紹介） ※他に29人の経験談をまとめました。

**青少年相談センター**

| 〇20 代前半、男性 |
|---|
| 【外とのつながりを持てなくなったわけ（困難を抱えた経緯）】<br>中2の頃、同級生とのコミュニケーションが苦手だったこともあり、苦痛になって学校に通えなくなった。学校には行かなかったものの、仲のいい友人とは毎日遊んでいた。<br>中3になって遊んでいた友人とトラブルになり、仲間外れにされた。そのことがショックだったことと、友人と遊ぶために外に出る理由がなくなったことで、それから外に出ることがなくなった。<br>家にいることで、人とのコミュニケーションがわからなくなり、さらに苦手になった。<br>高校へは進学はしたが、コミュニケーションの取り方がわからないまま進学したので、人との関係の築き方がわからず、誰とも話をせず、いつも一人でいた。“頑張っていかなきゃ”と学校へは行っていたが、1年の秋には学校に行けなくなった。その間、以前遊んでいた友達との関係は修復せず、外にも出られなくなった。高校は、2年の夏頃に退学し、社会のつながりがなくなった。<br>それから外に出ない状況が2年ぐらい続いた。<br><br>【 その時に思っていたこと 】<br>家の中では、ずっとテレビとゲームの生活で、その時のことはほとんど覚えていない。でも“外に出なきゃ”っていう強い思いはあった。でも出られない・・・それがとてもストレスになったし、つらかった。<br>母は心配してくれていて、いろいろなところに相談していた。<br>だんだんと対人恐怖のような感じになり、母親以外とはコミュニケーションをとりたくなかった。<br><br>【 青少年相談センターに来るようになったきっかけ 】<br>家にいて、すごいストレスが溜まっていった。ある時パニック発作になって、苦しくて、怖くて病院に行った。それが外へ出るきっかけだった。<br>センターは、親が見つけて相談していて、それから相談員が家に訪問することになった。最初の訪問の時は、事前に母から訪問に来ることを聞かされていて、“会いたくない”と反発した覚えはある。でも、“この生活から抜け出すのは今しかない”、“抜け出したい”と思ったので、相談員に会うことにした。<br>会う前は、怖いと思っていたが、会ってみたら想像とは違って、堅苦しい感じではなく、明るく、陽気な人で恐怖心は少しなくなった。<br>訪問は月1回ぐらいのペースで来てくれた。相談員と話すことは、社会とのつながりがない自分にとってすごく大きい事だったけど、外にはまだ出られなかった。<br>家庭訪問を受けながら、徐々に病院にも通うようになって、その後センターに行くようになった。でも一人で外に出るのはまだ怖かったので、センターへは母親と一緒に来ていた。それが 17 歳の時。<br>その後一人でセンターにいけるようになり、相談員からは 10 代グループに参加を薦められたが、同年代とのコミュニケーションはまだとれないと感じた。まだ年が離れていた方が話し易かった。<br>グループに参加したのは、センターに通って1～2年後だった。まずは少人数のグループ（ミニグループ）に参加し、徐々に同年代とのコミュニケーションに慣れていった。少人数は慣れてはきたが、その時は、通信制の高校に週4日通い始めていて、まだ学校生活に慣れていなかったこともあって、次の段階のグループには参加することができなかった。<br>通信制の学校は、単位をとるために学校に来る人ばかりで、友達を作る場がなく、コミュニケーションが全くなかった。<br>余裕ができたころ、ミニグループのメンバーと 10 代グループを見学した。その時は緊張して酸欠状態になり、手がしびれていたことを覚えている。それからはちょくちょくグループに参加していた。 |

【 支援を受けた感想 】

グループ参加には不安があったけど、ほとんどの人が気を使うわけでもなく、特別に接するというわけでもなかったので、自然に入ることができた。同じような悩みをもっているメンバー同士だったので、安心できた。

グループは週3回参加。その中で友達もできるようになって、外で遊ぶこともあった。

高校は前の学校の単位があったので、2年間で卒業して、病院に通院しながらしばらくはセンターに通ってアルバイトを探したりしていた。

グループは3年間参加。

センターで一番思い出深い事は、2泊3日の夏期宿泊体験。仲間とたくさん話すことができたこと、新しい仲間とも仲良くなれて、人との関係がうまく築けたと思う。夏期宿泊体験は参加してよかったと思うし、とてもいい経験だった。

自分がつながりをもてるようになったのは、先輩の利用者が話しかけてくれたり、趣味の近い人が遊びに誘ってくれたことが大きいと思う。

センターはとても話をしやすい環境だった。

【 現在の思い 】

今は福祉施設で働いている。

福祉の仕事には興味があった。“センターのような施設は自分にとって助かっている”と思ったし、”自分もこのような場所で働きたい”と思って、それが興味を持つきっかけになった。

また、刺激を受けたのは親・子宿泊研修。「福祉系の通信制の大学に通って卒業をして、その後仕事について今では家庭を持っている」という先輩の体験談を聞いて、それが目標になった。この体験は本当にありがたかった。

去年の9月には、福祉の通信制の大学に入学した。

福祉の仕事は、母親が福祉に興味があることを知っていて、新聞の求人誌で見つけてくれた。

今までは面接を 10 回以上も受けていたが、どれもうまくいっていなかった。相談員からは「諦めずに続けていくこと、自分の目指すものに近いものは、積極的に挑戦していこう」とアドバイスをもらっていた。今回は、自分の興味がある仕事でもあったし、福祉の通信制の大学に行っているし、”うまく話せばいけるかも”と思った。相談員から背中を押されたこともあって、気合も違っていた。

仕事の内容は、知的障害通所施設で利用している子についていろいろな活動の補助をしている。仕事はとても大変だけど、やりがいはある。採用されて3か月、今は利用している人たちに名前を憶えてもらえるとうれしく感じる。

センターを利用して本当に良かったし、ためになった。今もなかなか友人や親に相談できない仕事の事などでいろいろなアドバイスをしてくれて、とても助かっている。

こんな毎日が送れるとは思わなかったし、今では家にいると外へ出たいと思うようになった。

【 伝えたいこと 】

センターはいろいろ経験ができるしアドバイスもくれる。利用者の人たちもいい人ばかりで、いい場所。

無理のない範囲で通い続ければ、同じように悩んでいる人も変化していくと思う。小さな変化で自分自身は気が付かないかもしれないけれど、社会にだんだん適応できるようになっていく場所だと思う。

おとなしい人、人と話すことが苦手な人が身近にいたら、一言でもいいからなるべく声をかけてほしい。話さないからと言って、話をしたくないわけではない。自分から話しかけることができないだけだから、話しかけてくれることがうれしいと感じていると思う。